

物を大切に

吉田 由里子



今の子どもたちは、物を大事にしないといよく言われているようです。

日本は、経済的にとても恵まれた国であり、日常の生活用品のすべてを見ても、つぎつぎと出廻る新製品に追いまわされて生活しています。大人ばかりではありません。子どもたちのほしがる玩具、文房具などにもよく反映しています。

このような生活環境の中で、子どもたちは、欲しさのあまり手に入れた物であっても、一寸の間だけ楽しんで放置したり、惜し気もなく捨てるなどいつのまにか、物の価値に無関心になってきました。

おまけシール欲しさにチョコレート菓子を買っても、菓子は食べずに、すぐ捨ててしまうような子どもが増えているようです。それは、物に恵まれて

きている今の社会環境が、物を大切に
する心までも、だんだんと失わせつつ
あるからではないでしょうか。

園生活の中で、ハンカチャや靴下など
の落し物が増えてきました。繰り返して
落した子どもに呼びかけても「みつ
かった」と、安心した表情で申し出る
子どもは減少しており、園だよりで記
名をお願いしたり、参観日に話しても
お母さんの中には、「お母さんが物を
大切にしている心構えを持つことが、子
どもが物を大切にすることを育むこと
につながる」という趣旨が理解できな
い方もあります。

空き箱、空容器などの廃品も子ども
たちの創意工夫で楽しい遊具となり、
自分たちで考え、友だちと協力して創
りあげた作品は丁寧に扱って、遊ぶ表
情は生き生きしています。そうした作
品を持ち帰った時は、捨てたりしない
子どもを大事にしてほしいと、保
護者によびかけています。

物が少ない時代に育った私は、本、
文房具、ランドセルなど、こわしたり
破いたりしないよう大事に、大事に、
一つ一つの物を使いました。短くなっ
た鉛筆も、捨てるのが惜しくて、顔を
描いて人形のように箱に入れておいた
思い出もあります。

偏食がちな子ども、机の下に嫌いな
おかずを落してしまう子どもたちを見
るにつけ、小学生時代、昼食時によく
「弁当を忘れた」と言って鉄棒で遊ん
でみんなの食べ終るのを待っていたN

君、家庭の事情で弁当を持ってこれな
かったN君の気持ちを感じ出します。

物があふれ、季節感のなくなった野
菜や果物を口にすると、物が少な
かったからこそ、物の有難さや食べ
物のおいしさが味わえたことは、幸
せだったと思います。

子どもたちには、折に触れてこうし
た体験を話し、物を大切にしている心
が、優しさや思いやりの心を共に育ん
でほしいと願っています。

(小野町立小野新町幼稚園教諭)

わが娘たち

白井 初枝



「お母さん。お帰りなさい」

ダダダッとかけてよってくる二人の娘を
抱き、赤いほっぺたにほおずりするの
が日課となっています。

「お母さん、お仕事ご苦労様」

おしゃまな長女のこんな大人びた言葉
を聞くと何だか不思議な気持ちです。

長女を出産した時、「世の中の母親は、
こんな苦痛を経て、子どもを生み育て
ているか」と感動したのですが、そ
の時からたった五年で、もうすっかり
一人前(?) になってしまおうのですか
ら。

「まったくもうお母さんはだめなんだ
から」

「お母さん大好き。腕枕して」

「お母さんの作ったお弁当なら、何で
もうまいよ」

本当に口も舌も、やられてしま
います。入園式では、となりの子を
「静かにしなさい」と指導したとの
話を聞き、さすが血をひいていると苦
笑してしまいました。

下の娘は片言しかしゃべられないの
に、言っていることは何でも分かり、
姉と同じことをしがります。

ごはんも自分で食べたり、そこい
らじゅうごはん粒だらけになります。お
もちゃの取り合いに負けては、じだん
だふんで泣き叫び、水をくれと指をさ
して命令し、高い高いをしてもらっ
ては、キーンキーンはしゃぎます。その
声、表情、しぐさがとてもかわいいさ
かりです。

はじめは、親としての余裕もなく、
自己中心的な育児をしていましたが、
子どもが笑い、歩き、ことばを発する
その成長に驚き、感動させられるたび